

◆ コロナ禍に負けない住民パワー「はなれてもつながる事業」について

(1) 接触制限は社会的孤立を深める。みんなが集まれなくなる。さあ、どうする。

・・・「お互いさま」の助け合い活動にコロナ禍が突きつけたもの

○ 令和 2 年度、校区社協が取り組んできた小地域福祉活動も例外ではなく、新型コロナウイルス感染拡大という、これまで経験したことのないきわめて特異な状況下に置かれることとなりました。コロナ禍により、人と人との間に距離を取り、接触する機会を減らすことが求められています。これにより、さまざまな活動を通じて、誰もがいきいきと安心して暮らせる地域を目指し、つながりづくりを進めてきた私たちの活動は制限され、力を発揮できない状況に追い込まれました。

○ 感染リスクをゼロにしようと思えば、誰とも会わず、何もしないほうがいいことは分かりきっていますが、つながりを切ってはいけない人たちがいます。なんとかしたいという思いと、私たちの活動が感染者を出しはしないかという心配。悩み葛藤のなかで生まれたのが、「はなれてもつながる」活動であり、「ちいさくあつまる」活動です。住民の方々のアイデアや工夫といった着想は素晴らしく、地域の課題を解決する起点とパワーは、現場にこそあることを再確認させられます。つながることをあきらめず、感染防止策を講じながら活動する方法や工夫が、次々に生まれていきました。

(2) すごいぞ、つながりを切らない地域福祉活動

・・・予防医学や老年学の専門的立場からの知見が教えてくれること

○ 高齢者が感染を恐れるあまりに外出することなく自宅に閉じこもり、人との交流の機会や社会参加の機会がなく、地域のなかで孤立状態になれば、転倒や孤立のリスクが高まり、うつ病の発症や認知症の進行等の間接的な健康 2 次被害が生じる可能性が高まります。

○ コロナ感染症としての直接的な被害者は数 10 万人ですが、長期間の自粛生活による 2 次被害は数 100 万人と、より多くの人たちに及んでいます。コロナ感染症よりも恐ろしい高齢者の機能低下を防止する工夫の価値と効果は、実はとても大きいのです。つながりづくりを絶やさず、これまで取り組まれてきたようなさまざまな地域福祉活動をコロナ禍においても工夫して展開していくことで、救われる多くの命があります。また、最近の研究結果では、友人や知人に会う頻度が少なくても、手紙や電話、メール等で連絡し合う非対面の交流がある人は、うつが少なくなることが分かりました。非対面でも人との交流が重要であることが分かります。

(3) ハー そんな活動してるんだ。それって、「住民流」！

・・・知恵や工夫、思いを共有することで、未来の豊かな“つながり”へ

○ 令和 2 年度の「赤い羽根ありがとうマップ」では、校区社協ごとの「イチオシ事業」ではなく、各区社協が推薦する「コロナ禍に負けない住民パワー『はなれてもつながる』事業」を紹介することにしました。それは、私たちの未来は、予期せぬ事態、コロナ禍を乗り越えた先にあり、「with コロナ」時代の地域福祉活動をつくり、「コロナ」後の本格的な取組みにつなげていかななくてはならないと考えているからです。

○ さまざまな工夫によりつながりを絶やさない地域の活動は、コロナを乗り越えるという目標を、乗り越えられるという確信に変え広がりつつあることを実感させるものです。私たちのコロナ禍をきっかけとした「はなれてもつながる」取組みは、感染症や災害などの特異な環境下でもつながりをあきらめない工夫があることを示してくれています。

○ これから紹介する事例は、私たちにさまざまなメッセージを届けてくれます。みなさん、“物理的な距離はとらねばなりません、心の距離は縮められるはず。思いを馳せること、思いを届けることを増やしましょう。”そして、“いろんなアイデアを持ち寄り、新しい連帯の方法を形にする、知恵と力を出し合う取組みを加速しましょう。無理のない範囲内で。”